

脱走兵「歩兵は生きた盾」

ウクライナ 侵攻 4年

ロシアが侵攻を続けるウクライナでは戦闘の長期化で兵員不足が深刻化している。脱走や徴兵逃れが後を絶たず、ウクライナ国防省は1月、脱走兵の数は20万人に上ると明らかにした。彼らは何を思い、脱走を決意するのか。記者は指定された場所に赴いた。

マ 3/26

モルドバ国境に近いウクライナ南部オデーサ州の人の少ないある村を訪ねると、ウクライナ軍から脱走したセルヒさん(28)とエフゲニーさん(29)が姿を現した。人目を避け、近くの平屋建ての民家に記者を案内し、脱走の経緯を話し始めた。



「タイル関係の仕事をしていたセルヒさんは2024年末、業務中に地方の徴兵事務所の担当者に声をかけられた。車で事務所に連れられると、そのまま軍に動員された。「抵抗することも考えたが、無駄だと思

10キロの村に潜んだ。約1カ月後、ロシア軍の猛攻を受けた。無人航空機(ドローン)や迫撃砲などの攻撃に一日中さらされ、極度の緊張状態が続いた。「敵のドローンが急接近するのが見え、榴弾砲が爆発した」。金属の破片が飛び散り、家屋の厚さ50センチの壁を貫いた。砲撃で飛散した石で背中に重傷を負った。祖国のために命をささげる。多くの兵士がそう理想を語る。だが、セルヒさんが戦場で見た現実はず違った。「前線では正確な情報が提供されず、兵員の交代もなかった。歩兵はただ『生きた盾』として使われていると感じた」

ある日、セルヒさんに充電器と水を運ぶよう命じた。指示された輸送路が、地雷原の中にあつたことを後で知った。小隊長と部下の関係は良くなかった。命令に悪意があつたのかは分からない。ただ、上官の判断一つで兵士の運命が決まる現実を痛感した。

セルヒさんは25年6月、けがの治療のため2週間の休暇が与えられ、実家に帰った。以前に2度の心臓発作を起こしていた父は、休暇の最後の日に再び胸の痛みを訴えた。部隊に連絡し、休暇の延長を申請したが認められなかった。隊への帰還命令を無視し、父の体調が回復するまで看病を続けた。軍事検察庁はセルヒさん

を「無断離隊者」(AWOL)として認定した。軍に見つかれば罪に問われ、最も危険な前線に送られる可能性もある。だが、身を隠しながらの生活を続ける決心をした。「友人たちからも小遣い稼ぎの仕事をもらっている。注意深くやれば十分生きていける」

現在、戦線はこうちやくし、ウクライナ領内とその周辺に約60万〜70万人を展開するロシア軍に対し、ウクライナ軍は30万人を下回る前線兵力で抗戦する。脱走兵の増加は兵力の差をさらに拡大させる。

【ウクライナ南部オデーサ州で宮川裕章、写真も】

3面につづく

強引な徴兵 脱走招く

「動員逃れ」200万人

ウクライナ 侵攻 —4年

1面からつづく

ロシアへの抗戦を続けるウクライナ軍で多くの脱走兵が発生する背景には、徴兵担当者による強引な動員がある。納得しないまま半ば強制的に徴兵事務所に連行された人たちは、配属前の訓練の段階で、脱走の機会をうかがう。

車に押し込まれ

軍から脱走したセルヒ

ン(28)の小学校時代の同級生で、同じく脱走兵のエフゲニーさん(29)は2024年10月、ウクライナ南部オデーサ州の村で、仕事場から徒歩で帰宅していた時に軍用ナンバーの車が横に止まった。車内の徴兵担当者から徴兵関係の証明書の提示を求められ、持っていないことを伝えると、車に押し込まれ、ドアをロックされた。

徴兵担当者はその後も村を巡回し、同じ要領で別の男性を連行した。男性は「俺には小さな子供がいる。まだ読み書きすらできないんだ」と抵抗したが、聞き入れられなかった。エフゲニーさんが連れて行かれた徴兵事務所では、「人を殺せるか」などの

心理的な質問が書かれた書類に記入させられた。エフゲニーさんはすべて否定的に回答したが、「あらかじめ記入された別の書類がすでに用意されていた」。書類を作成し、写真を撮られた後、訓練キャンプに連行された。すでに脱走方法を考え始めていた。

訓練中にキャンプ内を巡回する警備の任務を志願し、施設の配置や警備態勢を確認した。2週間に1度のシャワーの時間を狙い、風呂場に向かう途中で脱走を敢行した。近くの森に入り、約20分をやくみくもに歩いた。道路が近づくと、リュックに詰めてきた私服に着替えた。通りかかった車におびえながら、軍の車ではなくタクシーだった。運転手に「親戚に会うためにキーウへ行きたい」と声をかけ、運転手の口座に携帯電話のアプリで料金を送金した。首都キーウまでの道中、何度も

検問所を通過したが、脱走がばれることはなかった。エフゲニーさんは「幸運だった」と振り返る。

兵員不足に苦しむウクライナ軍では、頻発する脱走に加え、「動員逃れ」も大きな問題となっている。ウクライナの法律は、18

〜60歳の男性に軍への登録を義務づけ、25〜60歳が動員対象となる。だが、登録した住所と異なる場所に住むなどし、兵役を逃れる人は多いという。ウクライナのフェドロフ国防相は1月、「動員逃れ」としてリ

ストアップされている人が200万人に上ると明らかにした。前線で戦う兵士の約7倍、徴兵対象年齢者の約2割にあたる。

「逃走経路」考え

キーウ市内に住む徴兵忌避者のミコラさん(38)は歩道を歩く時、徴兵担当者が乗った車がいつ現れても逃げられるよう、常に車道の位置や最も効率的な「逃走

経路」を考えながら動いている。徴兵忌避者同士でSNSを通じて徴兵担当者の動向に関する情報を交換し、「人狩り」に遭遇しないよう細心の注意を払う。国や軍を憎んでいるわけではない。自宅で文化関係の仕事をし、時にチャリティオークションを開き、集まった金を軍に寄付している。

ただ、ミコラさんは、文化的な才能のある多くの人々が自ら戦地を志願し、死んでいくのを見てきた。ある歴史博物館の館長は、従軍したわずか数日後に亡くなった。「彼はウクライナの歴史や文化に精通し、語り継ぐことができる人物だった。彼が戦地に行くことが、本当に国家への貢献だったのだろうか」と思う。

自身は何らかの形で国に貢献できる自信はある。戦地で自分の能力を生かせるのならまだ納得できる。だが使い捨ての駒にはなりたくない。

イベント会場「狩り場」に

ウクライナ各地では、徴兵担当者や徴兵忌避者の「攻防」が続く。

人が集まる大規模なコンサートやイベントなどの会場は徴兵担当者にとって絶好の「狩り場」となる。このため、徴兵を拒否する人たちは近寄らないよう警戒する。だが、徴兵担当者はあらゆる場所で動員を進める。

今年2月、大寒波で気温が氷点下となる中、ロシア軍はキーウ周辺の電力施設や暖房施設をミサイルやドローンで攻撃した。ウクライナ非常事態庁は、電気や暖房の供給が停止したアパート群の脇に暖を取るためのテントを設置した。徴兵担当者はそこにも現れた。「私たちは集魚灯に寄せられ、網にかかる魚のように

扱われている」とニコラエフは言う。

また、度重なる徴兵担当者の不祥事が、徴兵に対する国民感情を悪化させている。メディアでは、裕福な家庭が徴兵担当者に賄賂を渡し、子供たちの徴兵を免除させるケースが報じられる。

| | |
|--------------|--------------|
| 侵攻前の人口 | 4200万人 |
| 国外避難民 | 590万人以上 |
| 現在の推定人口 | 3600万人 |
| 徴兵対象年齢者 | 1100万人 |
| 徴兵忌避者 | 200万人 |
| 兵員数 | 90万人 |
| 前線兵力 | 30万人 |
| 死傷者、行方不明者 | 50万~60万人 |
| 脱走兵 | 20万人 |

※国連、ウクライナ政府の推計などから

ウクライナの徴兵と兵力の状況

ている。富まぬ者が戦争に駆り出される不平等な現実が、徴兵への反発を生んでいる。

ウクライナのゼレンスキー大統領は23年8月、徴兵逃れに絡む汚職の多発を受け、全州の徴兵事務所のトップを解任した。だが徴兵を巡る汚職や不正は絶えない。「徴兵事務所の職員

の行動により、社会には緊張が高まっている」と脱走兵のセルヒさんは言う。「徴兵担当者は安全な場所から人を戦地に送り、私たちの命は危険にさらされる。この不条理は納得できない」フェドロフ国防相は1月、徴兵事務所の包括的監査を実施し、軍事訓練制度を「迅速かつ根本的に」改革する必要性を強調した。その上で「徴兵事務所の問

題は無視できない。包括的な監査後、長年蓄積された課題に対する体系的な解決策を提案する」と述べた。

ただ、兵員の補充がウクライナに重くのしかかることに変わりはない。仮に停戦が実現しても、ロシアが再侵攻する可能性は残る。米国が仲介するロシアとの和平交渉では、ロシアの再侵攻を阻止するためにウクライナへの「安全の保証」を米欧がどこまで提供するかが焦点となっている。

ウクライナ政府は、領内に再侵攻したロシアに対抗するために現有の総兵力の約90万人に近い、80万人規模の兵力を維持することが今後必要と試算する。徴兵事務所による強引な動員が続く可能性がある。キーウ国際社会学研究所のアントン・フルシエツキ事務局長は「停戦が実現した時、『戦争中どこにいたのか』という問いがウ

クライナ社会を分断させることになるだろう」と予測する。

脱走兵や徴兵忌避者については停戦後、軍が何らかの処罰や権利制限を求める可能性が高い。政府要職に就く条件として軍での経験を求め、脱走歴などがある人は要職に就けないなどの可能性があるといる。一方で「政府はさらなる人口流出を防ぐため、脱走兵や徴兵忌避者への厳罰は避けな

ければならない」とも話す。フルシエツキ氏は、停戦後、除隊した元兵士たちが十分な収入を得られないなどの経済的な問題に直面した時、戦わずに良い暮らしを送る人たちがいれば、不満を高めることになる」と指摘する。その上で「社会の分断を招かないためには、国家が退役軍人をどこまで支援できるかが肝要」と語った。

【キーウで宮川裕章】

毎日 3/26